

令和 5 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 教育の質的転換に関する事業

申請組織 現代マネジメント学部

申請組織長 役職名 学部長 氏名 植林 茂

統括責任者 役職名 教授 氏名 東 珠実

課題名 学生ピアサポート チーム・レナータの活動費

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	東 珠実	現マネ	総括・企画・運営
		植林 茂	現マネ・学部長	企画・運営
		現代マネジメント学部 事務室員		運営・連絡

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

学生控室の改修にあたり、学生の意見を取り入れた空間を構築するため、平成 27 年度に当時の 3 年生有志 6 名が「チーム・レナータ」を発足し、平成 28 年度には新 2 年生 7 名と新 3 年生 8 名が加わった。チーム・レナータは学生控室に対するニーズを探るためのアンケート調査の実施や業者への提案を行い、平成 28 年 9 月に学生控室が完成した。

学生控室はプロジェクトチーム名と同様に RENATA を愛称とし、これまでにない空間として昼夜問わず多くの学生たちに利用されている様子が伺える。チーム・レナータのメンバーは学生控室改修に留まらず、学生控室を活用したピアサポート活動をしていく有志として活動目的を発展させ、これまで、「資生堂ジャパン株式会社と連携によるメイク講座」「七夕・ハロウィーン・クリスマスなど季節のイベント」「ライブラリーコーナーの設置」等を実施し、学生の主体的な活動を通じたそれぞれのイベントのマネジメントに挑戦してきた。

令和 5 年度は、昨年度に続き、資生堂ジャパン株式会社との連携によるメイク講座を実施するなど、ピアサポートとしての活動をさらに充実させることを目的に活動を展開した。

2. 事業方法（特色・独創性）等 (300 字程度で記述)

令和 5 年度は新 3 年生 6 名に加え、新 2 年生 6 名を加えた 12 名体制で活動を開始した。新入生相談会、七夕の飾り付け、オープンキャンパスでの高校生のサポート活動、大学祭での資生堂コラボメイク講座、ハロウィーンイベント、クリスマス飾り付け、トイレ生理用品の設置調査、RENATA ライブラリーコーナーの整備・管理を実施した。チーム以外の提案を受け付けるご意見箱の設置も進められ、いずれも学生が主体的かつ効率的に事前打ち合わせやイベント準備を行い、PDCA サイクルを廻して企画・実施・報告を行った。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

1. アクティブ・ラーニングの実施

チーム・レナータの活動はすべて学生の自主的な企画や意見に基づいて行なわれている。

当初は会議に教員・事務職員が参加していたが、現在は学生が主体となって自ら企画を考え要所で教員・事務職員が助言や指導、運営準備へのサポートなどを行うというスタイルが定着している。また、イベントを実施するにあたり「誰が」「何を」「どうやって」行なうのかについて、教員・事務職員が具体的なアドバイスをしながら遂行してきた。これらの活動により、アクティブラーニングに期待される「自分で考える力」、「物事を動かす力」、「能動的に物事に取り組む力」の育成が達成できたとと言える。

2. ピアサポート

チーム・レナータ結成以来、定期的なメンバー募集を行うサイクルが定着してきており、学年を超えた横断的かつ継続的な体制の維持が可能となっている。各イベントでは学年を超えた協働が実施できており、多くの学生たちが希望している「上級生との交流」の環境もより整ってきている。また、令和5年度は新入生相談会においてピアサポートを実践することができた。

3. 企業連携

平成29年4月から資生堂ジャパン株式会社と連携し、令和2年度から新型コロナウイルス禍により連携実施を見送っていたが、令和4年度に続き令和5年度は大学祭におけるメイクアップ講座を企画。連携部署とは、前年度を引き継ぐ形で東教授の調整の下、対面式のイベントを実現させ有志としての連携活動を実践した。また、オープンキャンパスの学生プレゼンにおいては、株式会社カルビーからワークショップのための商品を調達し、実施後は、同社にフィードバックを送付するなど、代表者のリーダーシップにより、継続した取組を丁寧に行った。

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①アクティブラーニング	②ピアサポート	③企業連携	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

・事業の成果のとおり、学生控室「RENATA」の改修を契機にチーム・レナータが発足したが、有志の学生が10代続いて取り組んでおり、オープンキャンパスでも高校生に対するワークショップを行い高評価を得るなど、学部の特徴として機能している。今年度は、3年生のリーダー自らが問題意識を持ち、多くの取組が行われた。

・活動のできなかつた2年前の2年間と比較して、充実した活動内容となっている。しかし、引継ぎが行われているはずの活動にも停滞が見られ、リーダーが模索しながら主体的・積極的に進められた。

・メンバー募集に際し、掲示や説明会を実施し、参加者交流、メンバー間の相互理解を積極的に推進した。ボランティアで成り立つ組織のため学年毎の構成による硬直化も懸念されるが、チームのメンバーシップを育成することが課題である。

・代を重ねるに従い、運営・継続的なイベントにマンネリ化の予兆が散見される。今年度は、トイレ生理用品の設置調査など新たな取組も見られたが、活動の全体を通してPDCAを機能させ、一つ一つの成果や評価を次年度に効果的に生かすことや運営方法の工夫など、モチベーションの継続への取組も検討が必要である。